

昭和28年2月20日第三種郵便物認可 毎月1回1日発行
令和3年1月25日印刷 令和3年2月1日発行 第68巻第9号 通巻第813号

不二

一般版

2・3/2021



第70回書道學會展成績発表
令和2年度第2回昇格昇段試験課題発表

公益財団法人 日本書道教育学会

今月の競書課題

専門部

会友↗準会友↗月例課題
八段↗準六段↗昇格↗昇段課題

今月の出品期間 3月10日(水)～3月18日(木)必着

漢字半紙

左の語句を、半紙を縦使用、自運縦書き。(書体自由)

隔巢黄鳥並



山雨指溪足、斜暉転樹腰。
隔巢黄鳥並、翻藻白魚跳。

〔出典〕『鳴鶴作品草稿集Ⅱ 杜少陵詩集 卷十三 絶句』

〔読み〕巢を隔てて黄鳥並ぶ

〔大意〕巢を離れた所に黄鳥が並んでいる。

かな半紙

左の短歌を、半紙を縦使用、自運縦書き。
(変体がなの使用、漢字・かなの書き換え自由)

春ごとに花のさかりはありなめどあひ見むことは命なりけり

〔大意〕春がめぐり来るごとに、花の盛りはきつとあるだろう。けれど、私とその花と相会うということは、それに相応しい命が私に恵まれてからのことだ。

〔作者〕読人しらす(古今和歌集)

新和様半紙

左の短歌を、半紙を縦使用、自運縦書き。
(漢字・かなの書き換え自由、歴史的仮名遣いは尊重)

入りかかる日の赤きころニコライの側の坂をば下りて来にけり

〔大意〕西日が赤く入りゆくころニコライ堂の側の坂を下りて来た。

〔作者〕斎藤茂吉(一八八二～一九五三)

自運↗与えられた課題語句を課題とし、自運作品として筆墨紙、墨の磨り工合を工夫し、書作品として造型すること。それ故、先生に手本を書いてもらうことは避けるべきである。作品制作に当っては、古典からの集字などを試みて始めるのもよい。参考図書としては、現代字体字典(講談社)、五體字類(西東書房)、大字典(講談社)、古典かな字鑑(書藝文化新社)、広辞苑(岩波書店)、古語辞典(旺文社)などを見たい。

漢字条幅

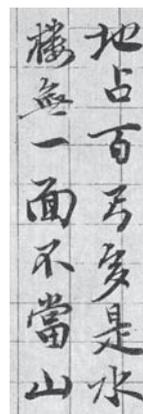
左の語句を、画仙紙半折(136cm×35cm)を縦使用、自運縦書き。(書体自由)

地占百弓多是水
楼無一面不當山

地占百弓多是水 楼無一面不當山。

〔読み〕地は百弓を占め、多くは是れ水、楼は一面として山に当たらずる無し

〔大意〕土地の広さは百弓を占め、多くは水である。楼閣は一面として山に当たらない。(劉後村)



かな条幅

左の和歌を、画仙紙半折(136cm×35cm)を縦使用、自運縦書き。
(変体がなの使用、漢字・かなの書き換え自由)

さ夜更けて声さへ寒きあしたづは幾重の霜か置きまさるらん

〔大意〕夜が更けて、鳴く声までも寒く聞こえる鶴は、幾重の霜が置き加わっているであろうか。

〔作者〕藤原道信朝臣(新古今和歌集613)

新和様条幅

左の短歌を、画仙紙半折(136cm×35cm)を縦使用、自運縦書き。
(漢字・かなの書き換え自由、歴史的仮名遣いは尊重)

独をりてさみしくなりぬ然れども誰に逢ひては何語るべき

〔大意〕ひとりさみしい身となったけれども誰かに逢ったなら何を話したらよいのだろうか。

〔作者〕窪田空穂(一八七七～一九六七)

4・5月号課題予告

漢字半紙	翻藻白魚跳	(鳴鶴作品草稿集Ⅱ 杜少陵詩集 卷十三 絶句)
かな半紙	古筆臨書課題	
新和様半紙	紫の藤ばなちりぬ青の羽よきつばくらの出づさ入るさに	(与謝野晶子)
漢字条幅	春水緑於僧眼碧 晚山濃似佛頭青	(鳴鶴作品草稿集Ⅰ)
かな条幅	わが眠る枕にちかく夜もすがら蛙鳴くなり春ふけむとす	(斎藤茂吉)
新和様条幅	桃の花ちりて桜の若萌のたなびく庭に夕かげ来たる	(土屋文明)

※課題及び課題の文字は変更することもあります。

書譜

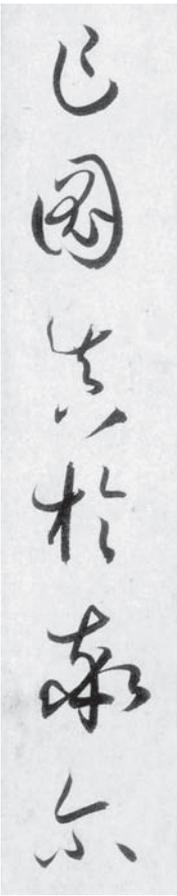
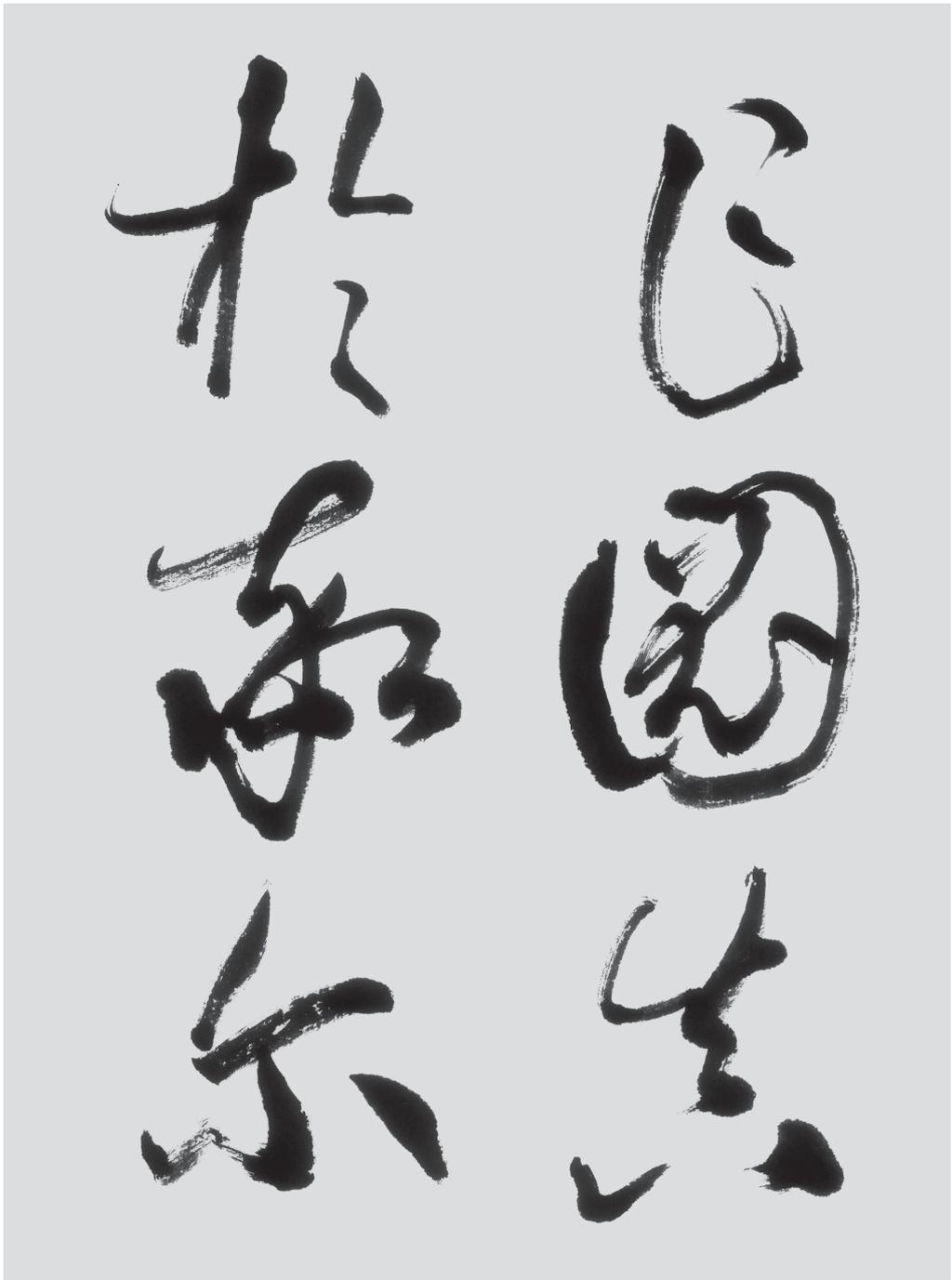
用新法但古今不同妍質懸隔
 隔危北之習又之游法以之
 於地雲西洛之海龜鶴花英
 之款比因其在於南尔或寫瑞
 於當手乃涉丹青三西新翰
 墨卷是也松式此所傳焉代

（其の来るや尚しく厥の）用や斯れ弘し。但だ今古同じからず、妍質懸隔す。既に習う所に非らざれば又亦た諸を略す。復た龍蛇雲露の流、龜鶴花英の類有り。乍ち眞を率爾に圖し、或は瑞を當年に寫す。巧は丹青に涉り、工は翰墨に虧く。夫の楷式に異なれば、詳にする所に非ず。代に（羲之が子敬に與えし筆勢論十章を傳う）。

（其來尙矣。厥用斯弘。但今古不同。妍質懸隔。既非所習。又亦略諸。復有龍蛇雲露之流。龜鶴花英之類。乍圖眞於率爾。或寫瑞於當年。巧涉丹青。工虧翰墨。（既）異夫楷式。非所詳焉。代（傳羲之與子敬筆勢論十章）。

漢字半紙 専門部(五段)準初段II昇段課題 『書譜』より「乍圖眞於率爾」の六字の臨書

石橋鯉城臨



『書譜』(唐六八七)孫過庭(六四八〜七〇三)

乍圖眞於率爾

(乍ち眞を率爾に圖す)

〈解説〉

復有龍蛇雲露之流、龜鶴花英之類。乍圖眞於率爾、或寫瑞於當年。巧涉丹青。工虧翰墨。異夫楷式、非所詳焉。

龍蛇雲露之流、龜鶴花英之類とは、古より伝説としてつたえられてきた字体のこと。それは、龍書、蛇書、雲書、垂露篆、また龜書、鶴頭書、花書、英芝書などの裝飾的要素の強い絵画的な書体を一括して言っている。こうした書体については論じるまでもない、といっている。

原帖では大細の変化はそれほどなく、比較的小静かな表現の箇所であるが、筆の返し、筆意筆脈と腋を開いて筆の抑揚(抑える揚げる)を確かめながら練習したい。

乍…覚えて使いたい草書。「作」にも応用できる。

圖…国構は、向い合わせの2画で囲むように。かまえの中の口は「口」、イは十、心は回、と見て書いてみよう。

眞…原帖ではこの字の下にくる「於」に向かう気脈が見られるが、ここでは収めるように書いている。

於…「方」を「オ」のように書く筆写体。

率…横・縦・中・左・右の順に書く。

爾…尔に同じ。

(習い方は28ページ)

【用具・用材】

筆…精品蘭蕊羊毫

墨…顕微無間

紙…松雪

始制文字乃服衣裳

始制文字乃服衣裳

始制文字乃服衣裳

漢字半紙（1級Ⅱ昇段課題、2級〜5級Ⅱ月例課題）
『三體千字文』より「乃服衣裳」の四字の臨書、または右ページ二十四字の臨書

石橋 鯉城 臨

乃 服 衣 裳

乃 服 衣 裳

【用具・用材】

筆Ⅱ蘭窓羊毫

墨Ⅱ冠（七〇周年記念墨）

紙Ⅱ手漉漢字用半紙

『三體千字文』目下部鳴鶴（八三八〜九三三）

乃服衣裳

〈読み〉乃服衣裳ダイフクイシヨウ

〈大意〉衣裳で身を包むようになった。

〈解説〉

○鳴鶴翁の三體千字文中の行書を学ぶ。

ここで廻腕執筆法により、坐法、姿勢、執筆の「型」を作りたい。

○犀水先生は廻腕執筆法を大切にし、書道教育の基本として生涯実践された。

○今回の課題は、四字の中で単独の文字構成「乃・衣」と偏旁「服」冠沓「裳」によるが、上の部分を軽く、下を重くした作品構成。全体のバランスが大切。

乃：平仮名「の」の原字。筆順は、片

仮名「ノ」を先に書く。第二筆の

（フ）の次は（ ）

起筆を縦から入れる。

服：概形は台形。偏の「肉づき」の胸をシメて裾広に。旁もすそを広くする。

衣：「乃」同様に横画と斜角が大切で類似性あり。概形は三角形、左右の釣り合いを。

裳：四字中最も画数が多いが、「裳」と「衣」の組合せ

中心を通して書くと字が立つ。

（習い方は28ページ）

高貞碑

(是に由りて) 少君の退讓の風(有り)、淵の嬌奢の患無し。故に赫赫の望、具瞻まこと允に集まるも、楨幹の期、朝に匪ひず(伊れ暮)。



(由是有) 少君退讓之風。無淵嬌奢之患。故赫赫之望。具瞻允集。楨幹之期。匪朝(伊暮)。

漢字半紙（6級〜10級11月例課題）

『高貞碑』を参考に「赫赫之望」の四字の臨書

石橋鯉城臨

赫赫之望

赫赫之望



【用具・用材】

筆 書學院廻腕用筆五号

墨 松鶴齋壽

紙 松雪

『高貞碑』（北魏五二三）

赫赫之望

〈読み〉赫赫かくかくの望ぼう（具つぶさに瞻まて允まに集まる）

〈大意〉盛んな名声（は高貞の一門に集まった。）

〈学習の目的〉

北魏方筆楷書の暢達した筆致を学び、我が国の近代書道の形成の歩みを辿り、横画の起筆のパリッと入る書き方折刀頭を試みる。

〈習い方〉

○廻腕執筆法で書くのが望ましい。方筆の厳しさを学ぶには却って羊毛の長鋒がよい。

○起筆は折刀頭（カッターの先を折ったときの刃先の形）では鋒先を当てて書く。

○なお、収筆の軽い抑え方にも留意したい。

赫：独特な筆写体。省画により、字形も美しい。六画目から十画目の表情の違いに注目。

之：概形は扁平につくる。転折は止まって点を打ってから向きを変える。

望：これも筆写体。「亡」は「上」鍋蓋に片仮名の「レ」。常用漢字になく書き慣れない人が多い。この字でその人の書道歴がわかるとも言われている。

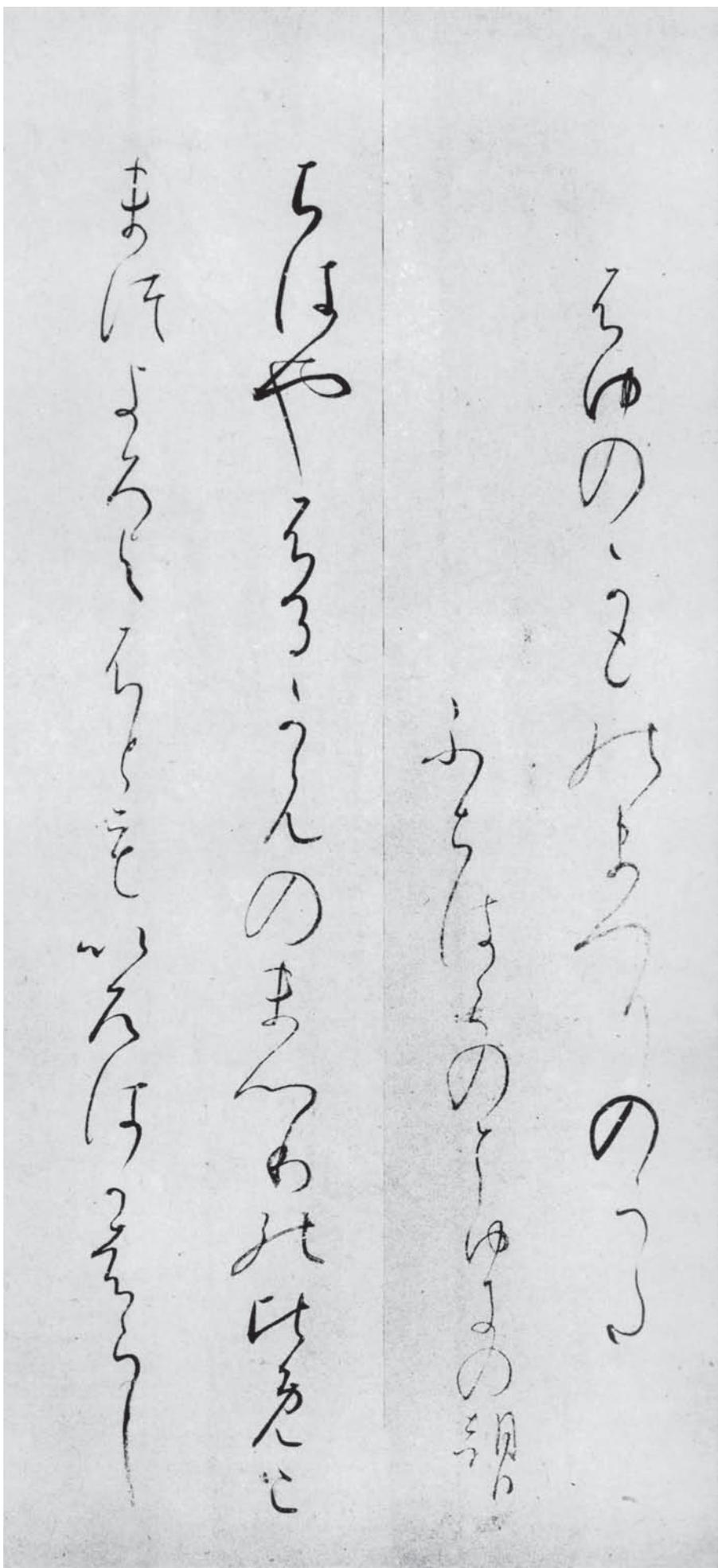
（習い方は29ページ）

かな半紙 専門部(五段)準初段II昇段課題)

左の図版より「不ゆの可も」から「以呂は可者らし」までの四行を、半紙を縦に使用して原寸以上に体裁よく臨書しなさい。

※原寸には拘らなくてよい。

(原寸)



『高野切第一種』

不ゆの可も能末つりのう多 ふちはらのとしゆ支の朝臣
ちはや不る可无のま川利能比免こま徒よろ (つ) 与不と毛以呂は可者らし

〈読み〉冬の賀茂の祭のうた 藤原敏行朝臣

ちはやぶる賀茂の祭の姫小松万代ふとも色は変らじ

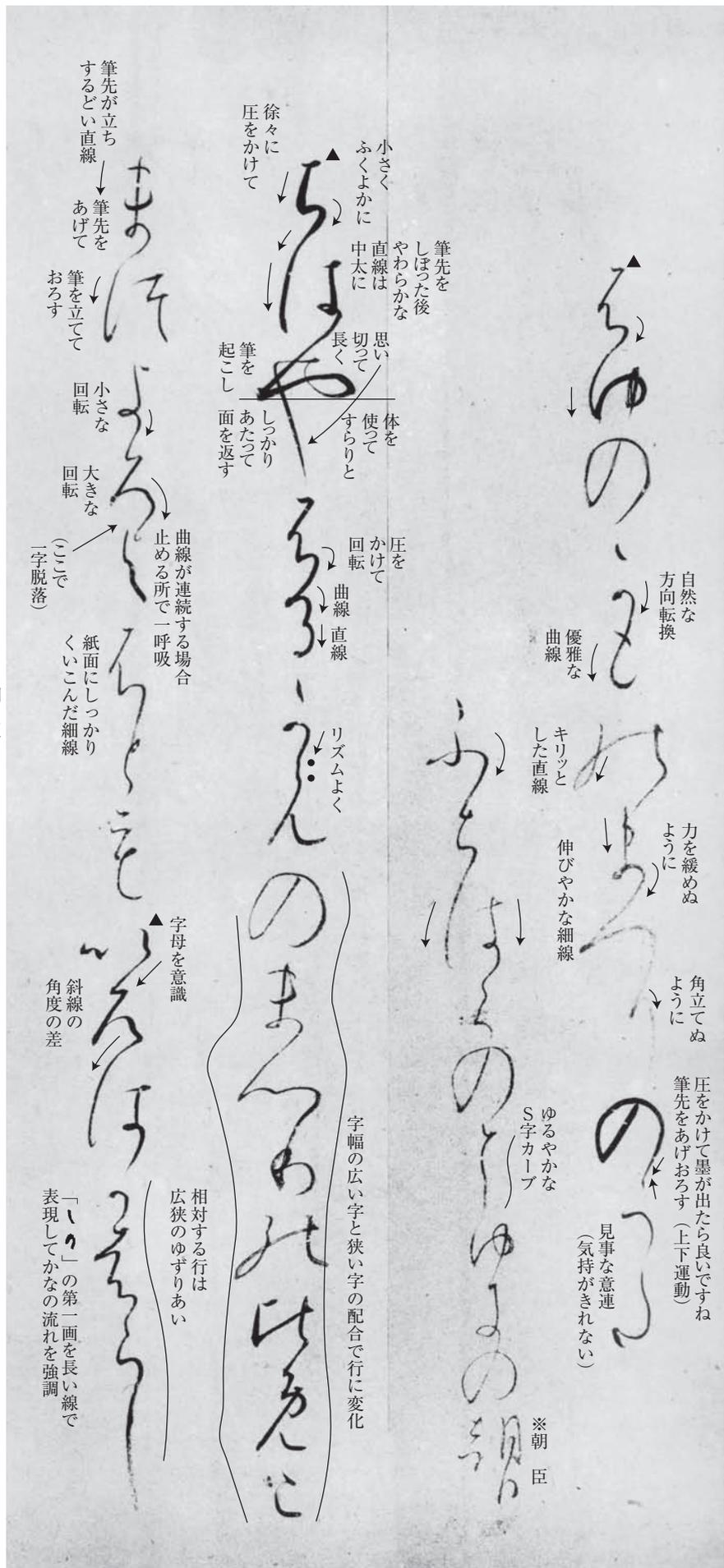
〈大意〉冬の賀茂の祭の歌 藤原敏行朝臣

賀茂の神域のかわいらしい松よ。万代を過ぎてもその若々しい緑の色は変わるまいね。

〈参考〉高野切第一種(古今和歌集 卷第二十 東歌)

課題解説 (かな半紙五段 準初段)

▲は墨つぎの一応のめやすです。筆圧のかけ方や墨の含ませ具合により変化します。墨量は書き進むにつれ少なくなり枯れます。腕力にたよらず体全体でゆつくり運筆し墨をしばらく出すようにします。



※「臣」の草書は「五」ですが、「臨」の草書「臨」から「朝臣」を書いたと思われる。



〈解説〉

○十一世紀・平安貴族の満ち足りた穏やかな気持ちを作り出した気品高い高野切第一種を今月も臨書します。まず課題をよく味わい観察しましょう。この時拡大コピーの力を借りるのも良いでしょう。かなは曲線で構成された文字が多く、その美しさに目を奪われがちですが、直線の存在が作品をひきしめ、細線には筆先で鋭く表現された勁さに気付きます。さて臨書は、真跡の字形に寸分の狂いもなく迫る事も必要ですが、のびやかな線質、そして生き生きとした運筆のリズムを受けとめる事が非常に大切です。(八尋光華)

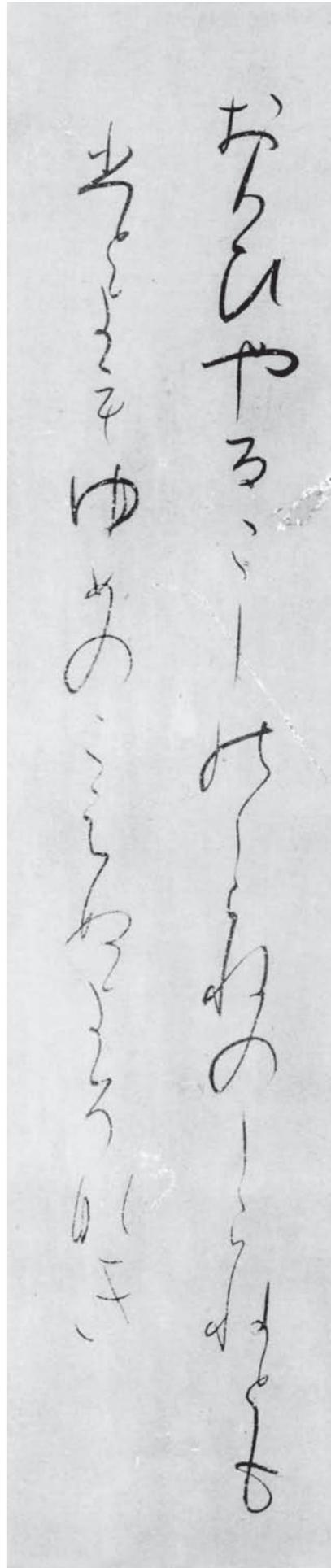
【用具・用材】

- 筆 かな用小筆
- 墨 かな用和墨
- 紙 かな用雁皮

かな半紙（1級Ⅱ昇段課題、2級〜5級Ⅱ月例課題）

左の『高野切第三種』より「お无ひやる」から「こえぬよ曾那き」までを半紙を縦に使用して体裁よく臨書しなさい。

※原寸に拘らなくてもよい。



（原寸）

お无ひやるこし能しらねのしらねとも悲とよ毛ゆめのこえぬよ曾那き

『高野切第三種』

〈読み〉

思ひやる越の白嶺のしらねども

ひと夜も夢のこえぬ夜ぞなき

〈大意〉

想像するだけの越の国の白山。私は知らないけれど、あなたに会うために一夜だつて夢の中で越えないことはないのです。

〈解説〉

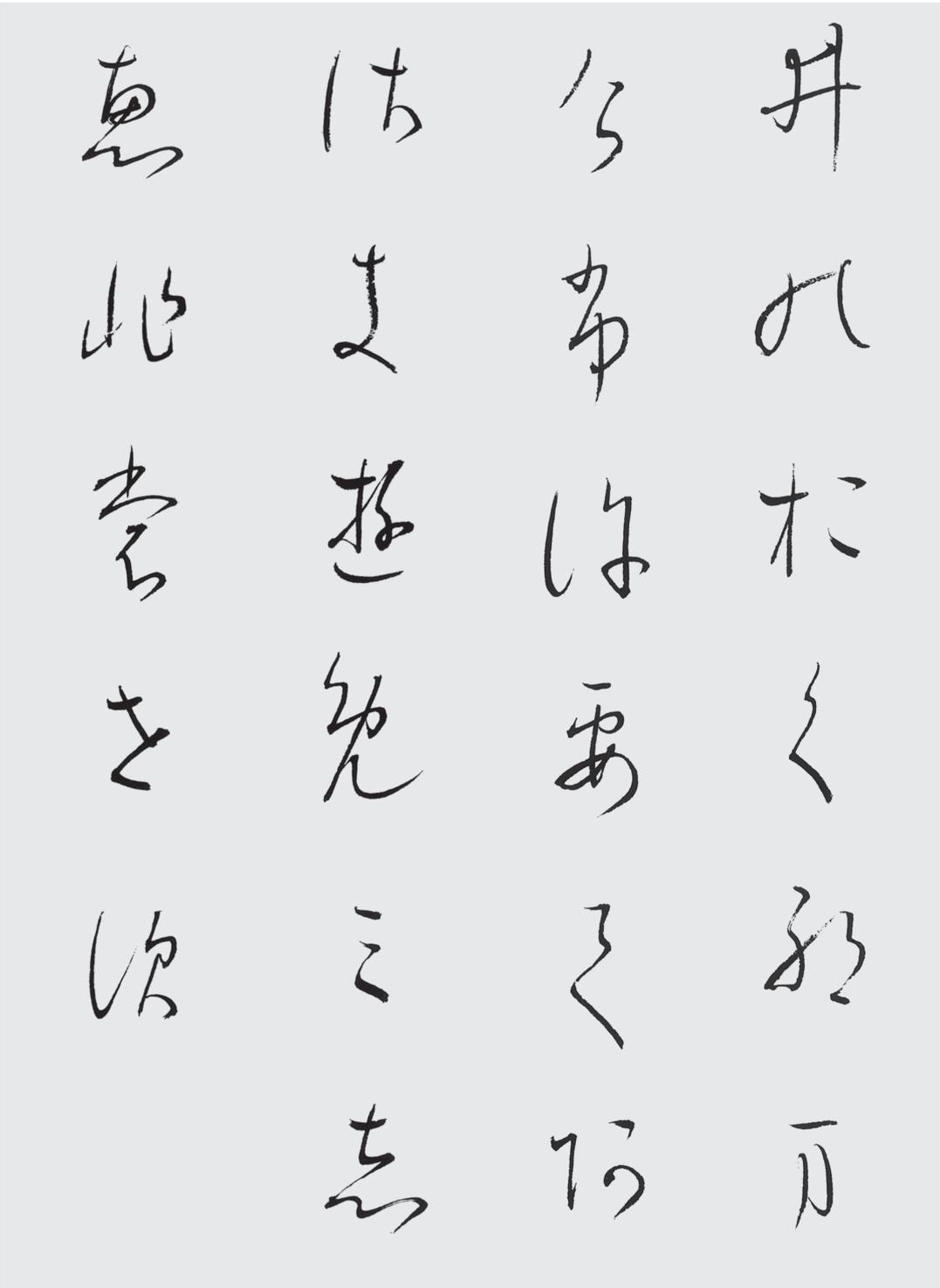
今月も高野切第三種の中から和歌一首を臨書します。

原寸にとらわれずに、たとえば120%位に拡大して書きますと半紙に体裁よくおさまりますし、拡大して書くことにより深い線、太細の変化の表現力が身につきます。

原本のもつ表情を尊重しながら取り組んで下さい。

※古今和歌集では「ゆめに」となっていますが、今回は原本の通り「ゆめの」と書いて提出して下さい。

（甲谷景子）



井能於久耶万介布許要豆阿
佐支遊免三志恵非裳世須

【用具・用材】
筆IIかな細字用筆
墨IIかな用和墨
紙IIかな用半紙

〔出典〕 本会通信教育教材より

〔読み〕

ゐのおくやま けふこえてあ
さきゆめみし ゑひもせす

〔解説〕

今回も変体がなの学習です。

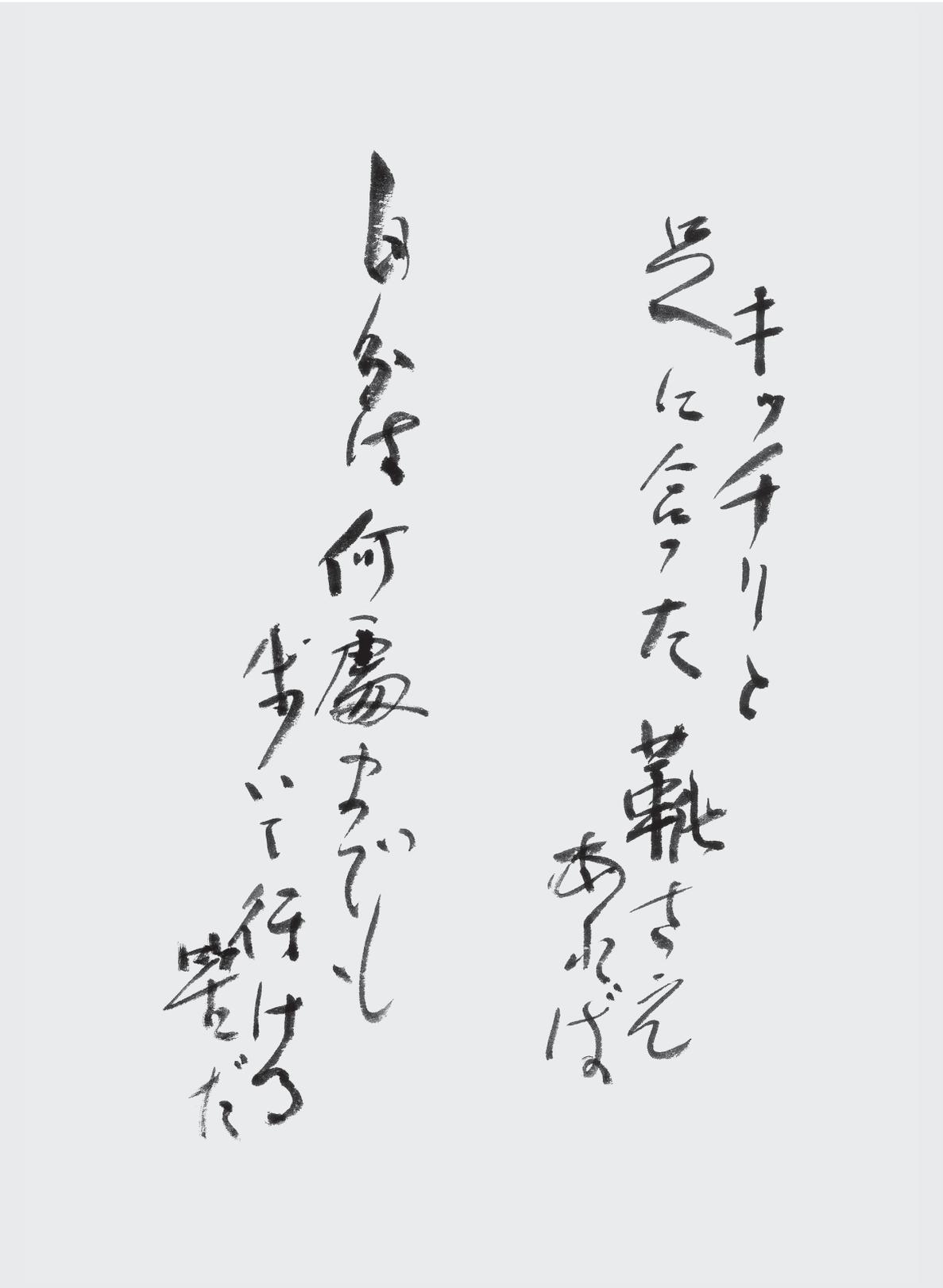
前号・今号の二号に渡って、一音につき一字の変体がなを挙げてきましたが、それ以外にも多くの変体があります。どのようなものがあるのか、各自調べてみましょう。

また、変体がなを学ぶ時には、その元になっている漢字・字母を覚えておきます。変体がなは表現の幅が広く、姿・形が様々に変化します。変体がなの本来の姿を考えずに見えている形ばかりを做うことは、不正確な変体がなを書いて誤字を生む原因になります。字典を引いて字母を確認し、それが簡略化される過程を辿る一手間を挿めば、自ずと誤字はなくなります。

字母を意識し、「正しい変体がなを書く」ことを心掛けて下さい。

(川島史子)

(習い方は29ページ)



〔出典〕「ユルスナールの靴」
〔著者〕須賀敦子

(一九二九〜一九九八)

○作品の構成として六行形式による三行二分割の作品。

○内容素材が「靴」ゆえに両脚を「並いわゆる並行」の女性用のブーツをイメージとした。

○前半は柔らかい表情を考える。冒頭の片仮名「キツチリ」に含墨、二つの漢字を大きくし、とくに作品のポイント「靴」を強調する。

○後半は前半と比較して重めにして作品の効果を高めたい。

【用具・用材】

筆 II 超長鋒羊毫細筆

墨 II 写経用墨

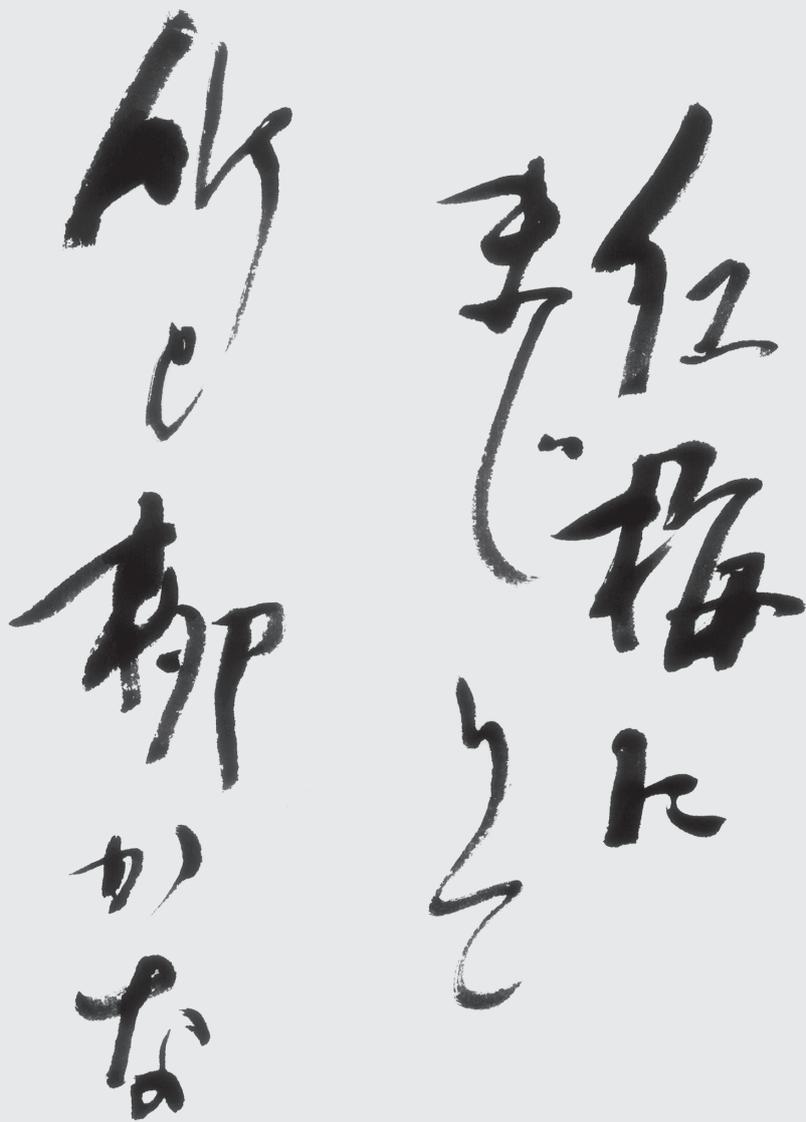
紙 II 手漉半紙

キツチリと足に合った靴さえあれば自分は何處までも歩いて行ける筈だ

新和様半紙（1級Ⅱ昇段課題、2級Ⅴ10級Ⅱ月例課題）

参考手本 ※半紙を縦にして使用

石橋鯉城書



紅梅に
紛れて
竹と
柳かな

紅梅にまじりて竹と柳かな

〈作者 永井荷風（一八七九～一九五九）〉

〈大意〉

紅梅に紛れて竹と柳が芽吹こう
としている。

書くに当たって

字数も少なく、半紙の全面を
使って書くので、普段千字文の行
書を書いているときの筆を使って
書くとよい。

「柳」は筆写体、竹も

「竹」と筆写体で書くことも
できる。

漢字の書体は普段書く行書で書
きたい。半紙を下敷きの上に置き、
上部を手にとって短冊や巻紙に書
くような姿で書くと筆圧もウマク
行く。腋も開き、鋒先も充分活躍
する。

（習い方は29ページ）

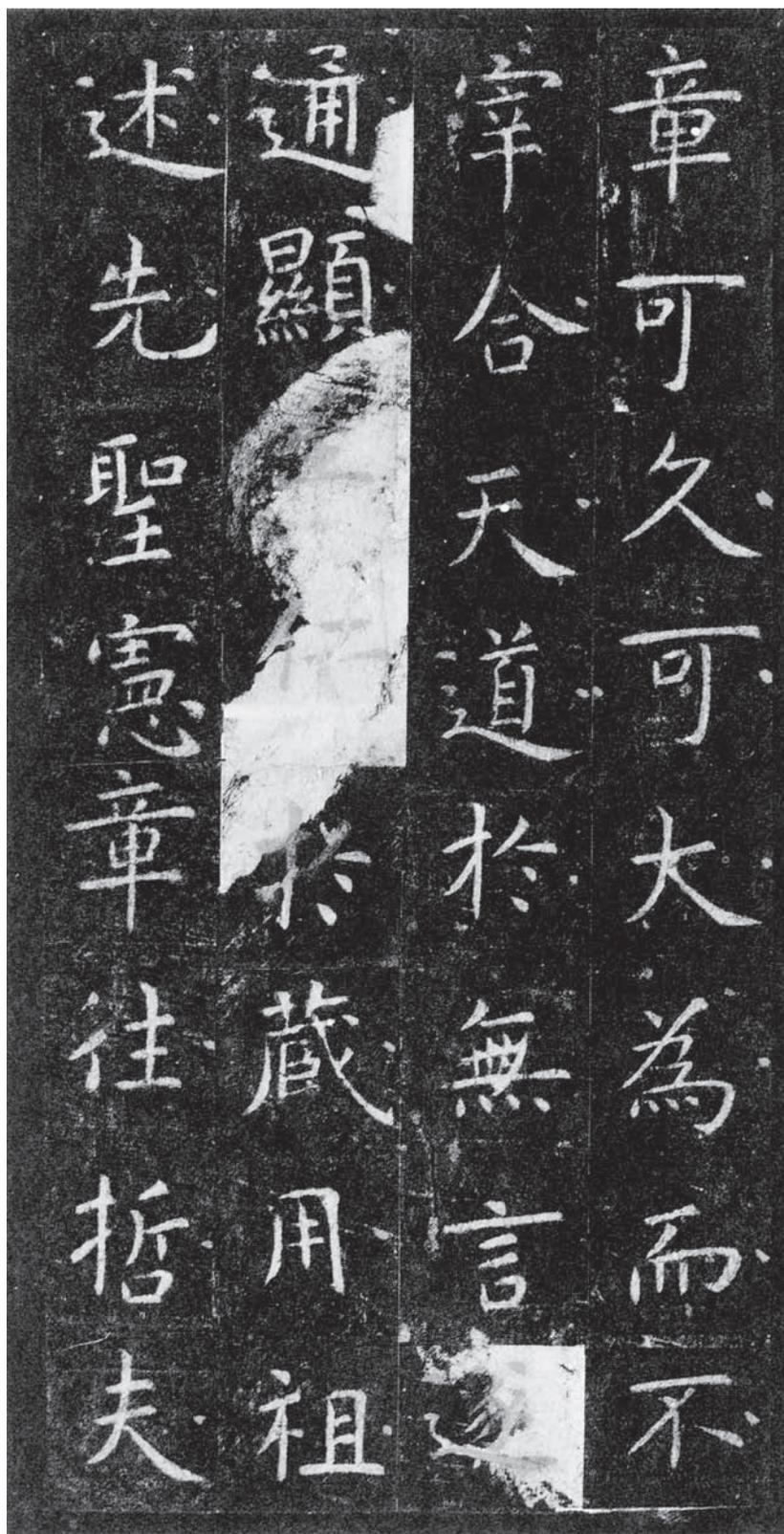
孔子廟堂之碑

(微を知り) 章を(知り)、久しかる可し。大なる可し。為して宰たらず、天道を無言に合す。遂に通じ、至仁を蔵用に顕わす。先聖を祖述し、往哲を憲章す。夫れ(其の道なるや)

虞世南(五五八〜六三八)
太宗帝の下での初唐の
三大家の一人

孔子廟堂碑は武徳九年、虞世南が太宗の命を奉じて聖廟の重修の由来を選文し、また自ら書いたもので、彼の六十九歳の書である。現存する彼の楷書碑として唯一のものである。

孔子廟堂碑の書は結構を向勢に作り、穏雅な姿態を示し、用筆も悠揚迫らず、右払いを思いきって暢達に作り、うちに力を含んで温健、沈着悠遠、品位の高さは唐朝第一と呼ばれている。よく整った結構で力がうちに働いているにもかかわらず窮屈さも感ぜず、潤いがあり、単調でなく、玉の肌の感じがするものである。



(知微知) 章。可久可大。爲而不宰。合天道於無言。遂通顯至仁於蔵用。祖述先聖。憲章往哲。夫(其道也)。

漢字条幅 専門部 (五段〜準初段II昇段課題)

『孔子廟堂碑』より「顯至」から「往哲」までを臨書しなさい。

(用紙 画仙紙半折・たて 136cm×よこ 35cm)

顯至仁於藏用祖述
先聖憲章往哲

香濤臨

顯至仁於藏用。祖述先聖。憲章往哲。

〈読み〉至人を藏用に顯わす。先聖を祖述し、往哲を憲章す。

〈大意〉(孔子は) ひかえめな仁愛をあらわした。またむかしの聖人の道を祖述し、賢哲の道を憲章した。

〈作者〉唐・虞世南(五五八〜六三八)

(解説は30ページ)

漢字条幅 (1級II昇段課題、2級〜10級II月例課題)

参考手本

(用紙 画仙紙半折・たて 136cm×よこ 35cm)

孤雲獨去閑

辛丑春日

小久保嶺石書



孤雲獨去閑

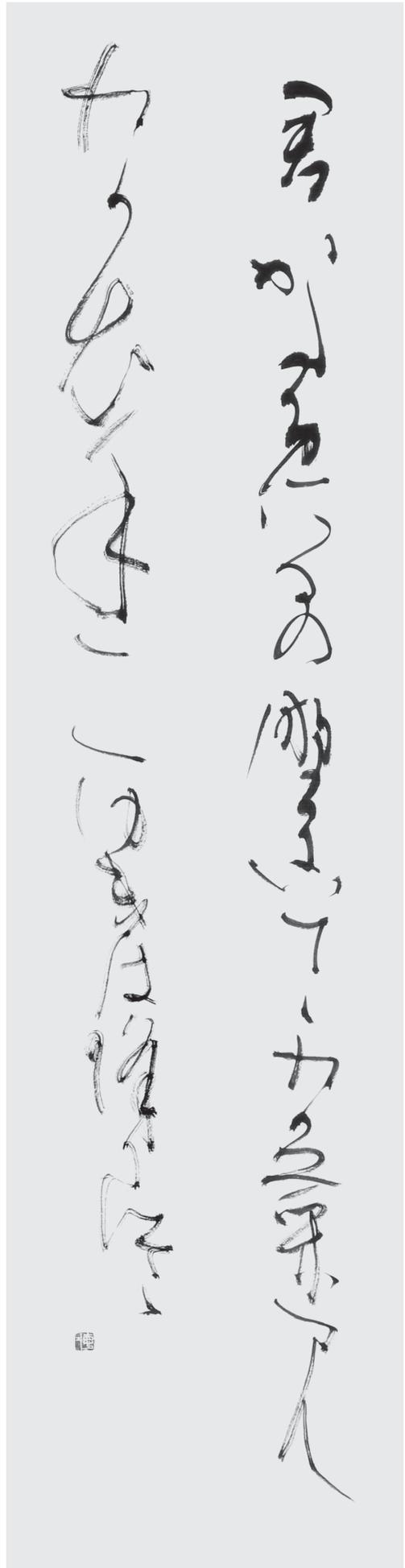
〈読み〉孤雲独り去って閑なり (作者) 李白(七〇一〜七六二)

〈大意〉ぼつんと浮かんでいたちぎれ雲も(どこかへ)流れ去ってしまった。

(解説は30ページ)

小久保嶺石書

林田香濤臨



中村清徳書

君か多免八るの野尔いて、わ可菜つ无 わ可衣手二ゆ幾は降り徒、

(解説は30ページ)

〔読み〕君がため春の野に出でて若菜つむ わが衣手に雪は降りつつ 百人一首 光孝天皇 古今集 卷一春歌上 仁和のみかど親王におましける時、人に若菜まける

御歌とされるされています。〔出典〕「百人一首15」光孝天皇

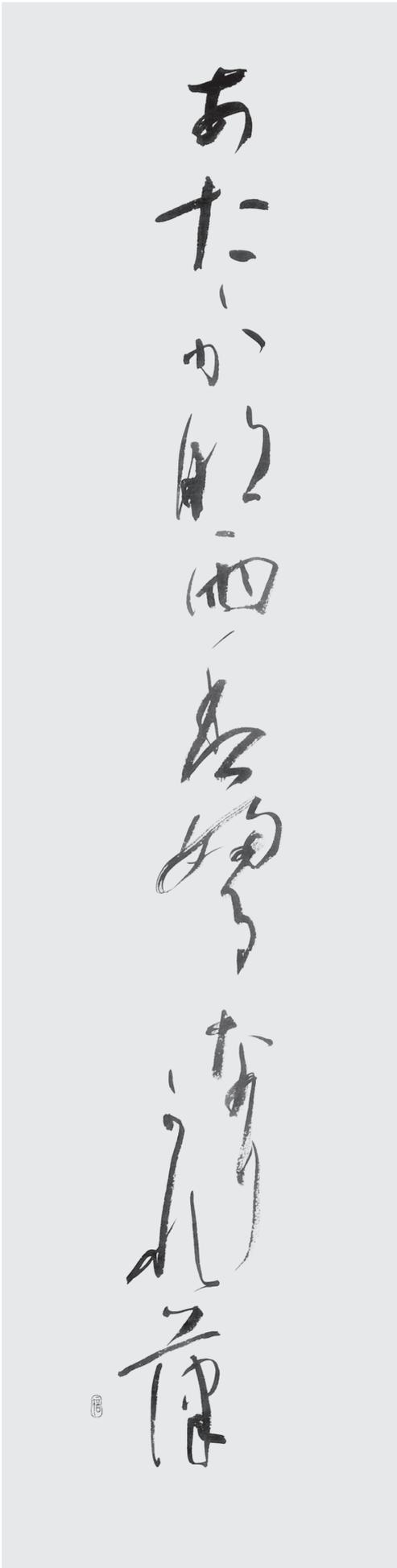
〔大意〕あなたにさしあげようと思つて、早春の野に出て若菜をつんでいるこのわたしの袖に、絶えまもなく雪がふりかかってくることです。

かな条幅 (1級 II 昇段課題、2級) 10級 II 月例課題

参考手本

※変体がなの使用、漢字・かなの書き換え自由

(用紙 かな用画仙紙半折・たて 136cm x よこ 35cm)



内堀信嶺書

あた、か那雨香婦るなり可れ葎

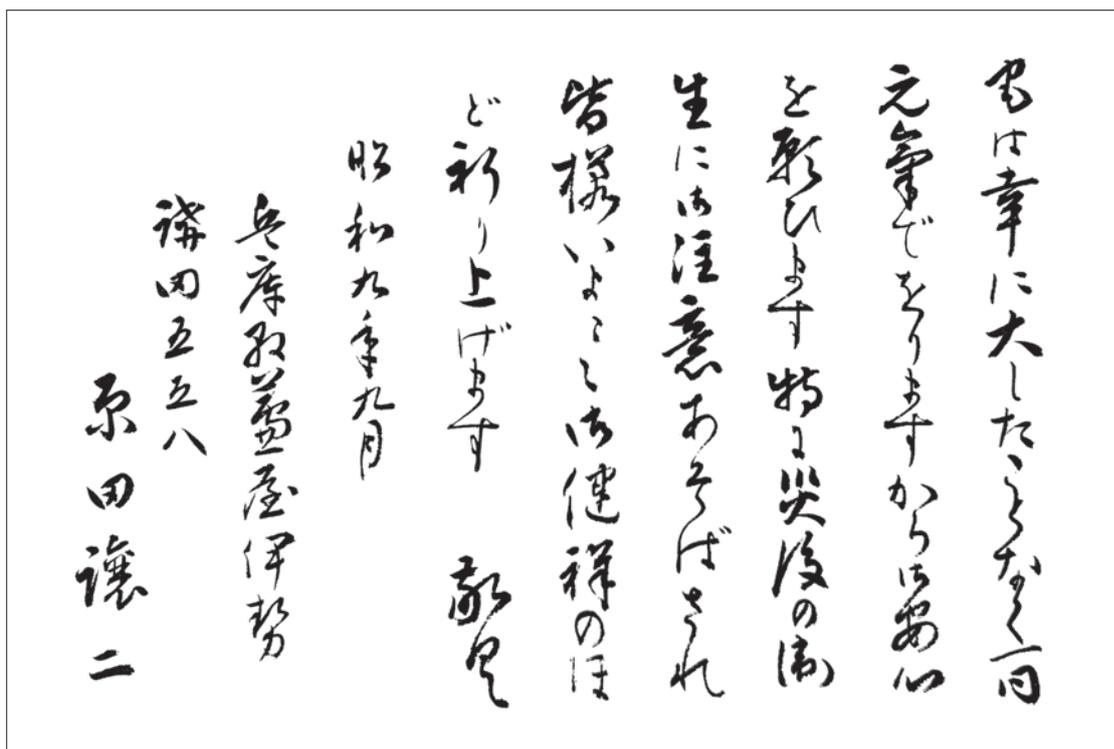
(解説は30ページ)

〔読み〕あたたかな雨が降るなり枯葎 出典 正岡子規 (一八六七〜一九〇二)

〔大意〕生い茂ったまま枯れている蔓草の藪は枯れたままだが、降り注ぐ雨は早春の暖かさで心をなごませることだ

実用書（随意課題）

戦前知識人の書簡文から文体と書風を学ぶ
第二回 原田譲二の手紙②



字書を活用する等して、まず文章を読んで理解することが大切です。

○上記書簡文を必ず小筆で清書し、文字の大小の具合に気をつけましょう。

○出品用紙は、下側に示した清書用紙でも、これをコピーして書いても結構です。ここでは洋紙に書くことを原則とします。

教室名	
氏名	
月別 出品券 を貼る	

↓バーコード出品券はこの下に貼ってください

謹啓 ふのたびの風水
害については早速お慰
まなう所見察をいただき
心からお礼申し上げます
方からこそお慰めお伺ひ
いたさねばならぬので
すまわれぬ所見察を
いたすたお慰めお伺ひ
りもごいせんでしたる所
見は幸に大した事なく同
元氣でもうすから安心
と致しもうす特々災後の衛
生には注意あそばされ
皆様いよいよ御健祥のほ
ど祈り上げます 敬具
昭和九年九月
兵庫縣蘆屋伊勢
講田五五八
原田讓二

平凡社

手紙講座より『書簡文の書き方例』

— 風水害の見舞状に対するお礼文 —

作文：原田讓二

揮毫：岩田鶴阜

戦前の教養人達の間で交わされた往復書簡の多くは、巻紙に墨書されたものが多く、此処に見るような書きぶりになつてゐる。今から八十六年前の手紙に見る表現力の違いに驚くが、書道の道に在る者は少しずつ見慣れ読み慣れておきたいので、暫く例文を見乍ら読み、且つ書き乍ら親しんでいくこととする。

〔釈文〕②

宅は幸に大したことなく一同
元氣でありますから御安心
を願ひます特に災後の衛
生に御注意あそばされ
皆様いよいよ御健祥のほ
ど祈り上げます 敬具

昭和九年九月

兵庫縣蘆屋伊勢

講田五五八

原田讓二

〈部首の草書形〉

フ		ニ		冠の部	
郷	記	𠂔	𠂔	𠂔	
響	選	巢	嚴	業	
		興	學	懼	
		留	櫻	榮	
		策	譽		
大		く		木	
貝	大	人	ハ	𠂔	木
賢	契	火	共	參	桑
		論	論		
		風	風		
		義	義		
		冬	冬		
		登	登		
		基	基		
		左	左		
		楚	楚		
		些	些		

是已皆大歡喜~通達無礙如一の百九十二字を清書して出品。

國寶 法隆寺伝来細字法華經 (擴大率二倍)

是已皆大歡喜得未曾有即時諸天於虛
空中高聲唱言過此無量無邊百千萬億
阿僧祇世界有國名娑婆是中有佛名釋
迦牟尼今為諸菩薩摩訶薩說大乘經名
妙法蓮華教菩薩法佛所護念汝等當深
心隨喜亦當禮拜供養釋迦牟尼佛彼諸

(既見)

是已。皆大歡喜。得未曾有。即時諸天。於虛空中。高聲唱言。過此無量無邊。百千萬億。阿僧祇世界。有國名娑婆。是中有佛。名釋迦牟尼。今為諸菩薩摩訶薩。說大乘經。名妙法蓮華。教菩薩法。佛所護念。汝等當深心隨喜。亦當禮拜供養。釋迦牟尼佛。彼諸

(既に)これを(見)已りて、皆大いに歡喜して未曾有なることを得たり。即時、諸の天は虚空の中において高声に唱えて言わく「この無量無邊百千萬億

阿僧祇の世界を過ぎて国有り、娑婆と名づく。この中に仏有し、釈迦牟尼と名づけたてまつる。今、諸の菩薩・摩訶薩のために、大乘經の、妙法蓮華・菩薩を教ゆる法・仏に護念せらるものと名づくるを説きたもう。汝等よ、當に深心に隨喜すべし。亦、當に釈迦牟尼仏を禮拜し供養すべし」と。彼の諸の

〔解説〕 石橋鯉城

此の度習う箇所には、9行目の「華香」諸嚴身之具の七字に表装時に生じる皺がある。その分、これらの字はそれごとく細身になっている。その事を顧慮して書かれた。渡来時には、何巻もの卷子仕立てだったので、あまり気付かれなかつたと思われる。

唯この一箇所だけに一種の不具合というか皺が文字にかかって、読みにくくなっているのは残念ではある。これだけの長文を正確に細字楷書で書き上げた筆者の力量にも驚かされる。人間の力の限界に挑戦するかのような集中力と信仰の力が相俟つての仕業に違いない。この細字法華經浄書伝来という一大事業に関わった方々の心情が伝わって来る。

歡喜 (1-5) 喜 (1-6)
即時 (1-11) 時 (1-12)
於虛 (1-15) 虛 (1-16)
聲言 (2-4) 言 (2-6)

衆生。聞虚空中聲已。合掌向娑婆世界。作如是言。南無釋迦牟尼佛。南無釋迦牟尼佛。以種種華香。瓔珞幡蓋。及諸嚴身之具。珍寶妙物。皆共遙散。娑婆世界。所散諸物。從十方來。譬如雲集。變成寶帳。遍覆此間。諸佛之上。于時十方世界。通達無礙。如一（佛土）

衆生は、虚空の中の声を聞き已りて合掌し、娑婆世界に向いて、かくの如き言を作す「南無釈迦牟尼仏、南無釈迦牟尼仏」と。種種の華・香・瓔珞・幡・蓋及び諸の嚴身の具・珍寶・妙なる物をもつて、皆共に遙かに娑婆世界に散ず。散ずる所の諸の物は、十方より來ること、譬えば雲の集るが如し。變じて宝の帳と成りて遍く此間の諸仏の上に覆う。于時、十方世界は通達無礙なること、一（仏土の）如し。

衆生聞虚空中聲已合掌向娑婆世界作
如是言南无釋迦牟尼及佛南无釋迦牟尼
佛以種種華香瓔珞幡蓋及諸嚴身之具
珍寶妙物皆共遙散娑婆世界所散諸物
從十方來譬如雲集變成寶帳遍覆此間
諸佛之上于時十方世界通達无礙如一

12

11

10

9

8

7

礙
(12-14)

成
(11-10)

譬
(11-5)

之
(9-15)

嚴
(9-13)

及
(9-11)

帳
(11-12)

雲
(11-7)

具
(9-16)

身
(9-14)

諸
(9-12)

全文音読して和漢混淆文の響きの美しさに触れましょう。
図版中文字で、判然としないところは、經典の「釈文」中の同字の書き方に倣って書きます。

清書の氏名の後に「謹寫」または「敬寫」の二字を書き添えます。

不二篆刻研究室

▼規定：左の語句を刻しなさい。(朱白自由・大きさは4センチ角以内)

福寿杯

〈読み〉 福寿杯 ふくじゅはい
 〈大意〉 幸福と長命とを祝うさかづき

▼随意：好きな語句を刻しなさい。(朱白自由・大きさは4センチ角以内)

○作品は「半紙横 $\frac{1}{2}$ 」を縦長にして体裁よく押印し、印影を提出。

○巻末の出品要項をよく読んでご出品ください。

一字書

▼規定：左の語を創作しなさい。(書体自由)



〈読み〉 カイ、かに
 〈意味〉 節足動物の一種。

〈おすすめの利用・用材〉

萬象 50枚 (夾宣)

作品の左下に教室名・氏名・会員番号・段級を鉛筆で記入のこと。

▼随意：左の語を創作しなさい。(書体自由)

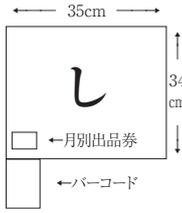
仮名の成り立ち「之」を考えて創作すること。

〈おすすめの利用・用材〉

一字書 100枚 (夾宣)

特選一字書 100枚 (夾宣)

作品の左下に教室名・氏名・会員番号を鉛筆で記入のこと。



○バーコードは、段級欄に「一字書規定○段(級)または「二字書随意」と書いて貼付してください。(規定の方は段級を忘れずに)

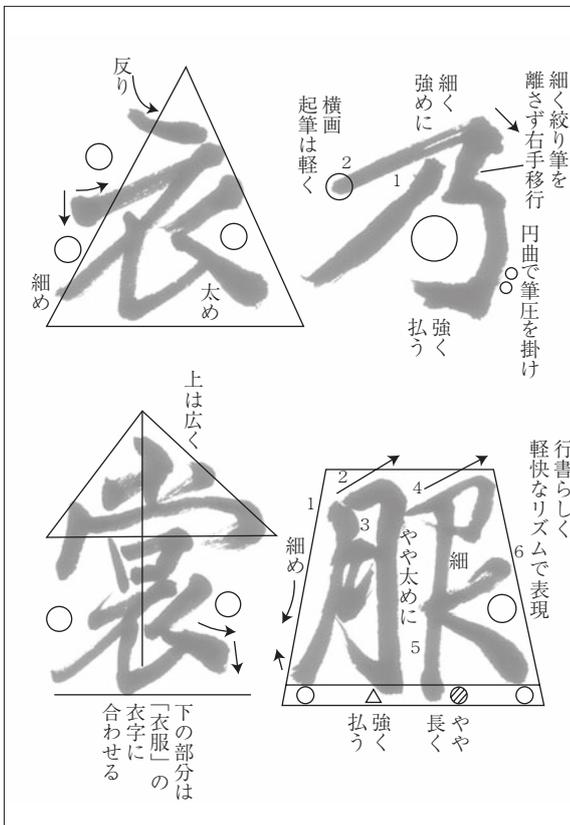
○落款は印のみか一字に雅印ぐらいで。

○巻末の「競書出品要項」をよく読んでご出品ください。

課題解説

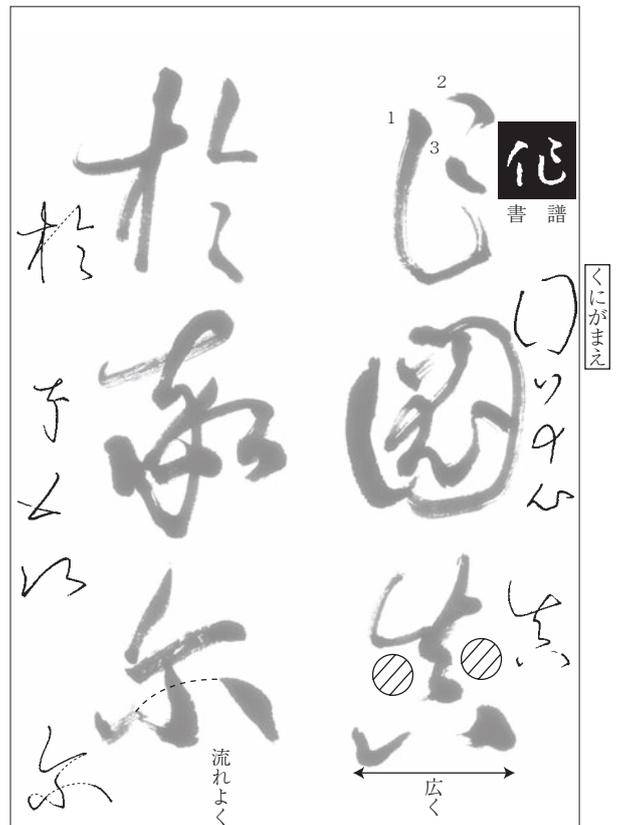
今月の出品期間
 3月10日(水)～3月18日(木)必着

漢字半紙 1級～5級 (三體千字文)



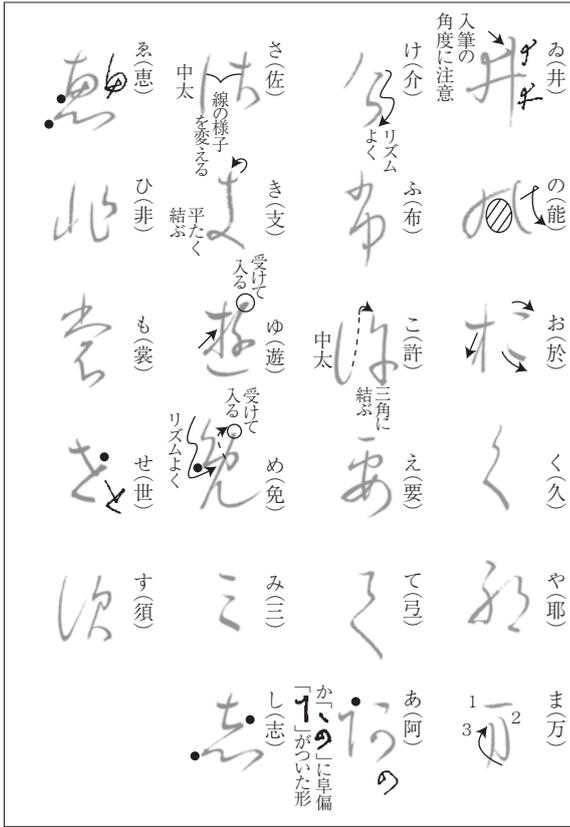
(石橋鯉城)

漢字半紙 五段～準初段 (書譜)



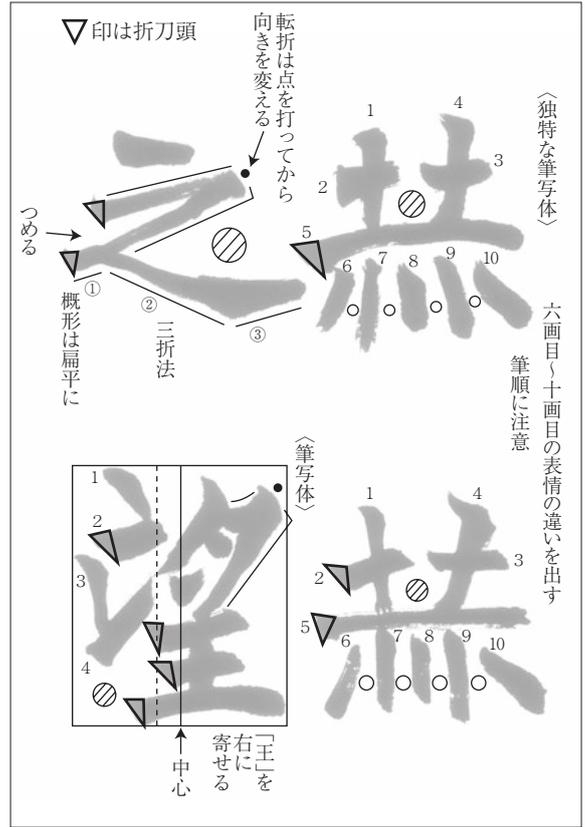
(石橋鯉城)

かな半紙 6級~10級



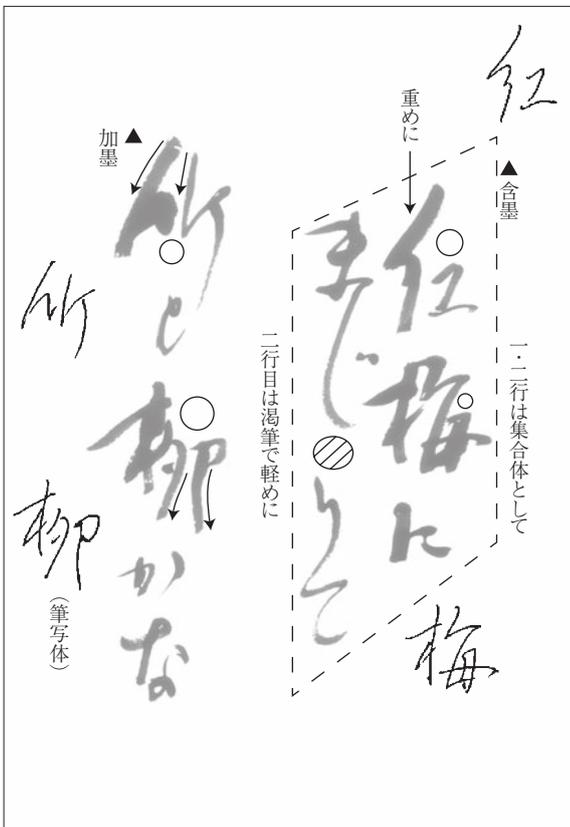
(川島史子)

漢字半紙 6級~10級 (高貞碑)



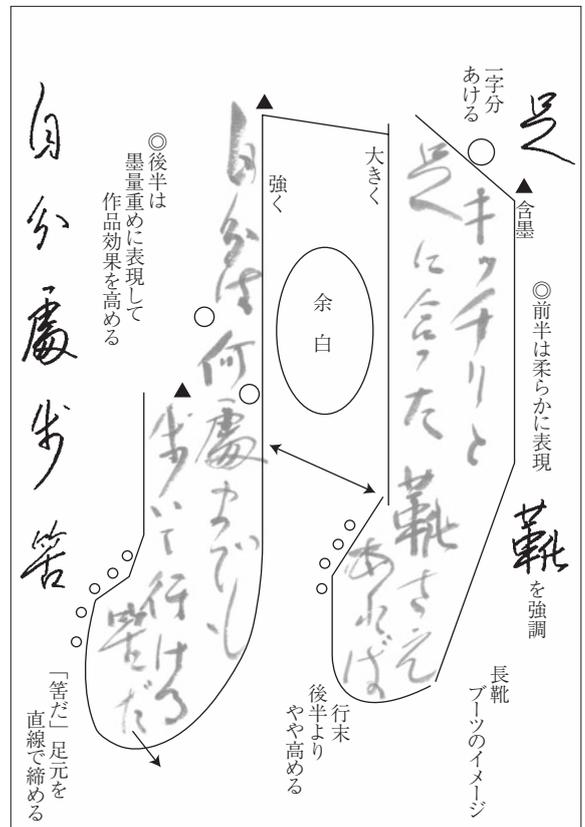
(石橋鯉城)

新和様半紙 1級~10級

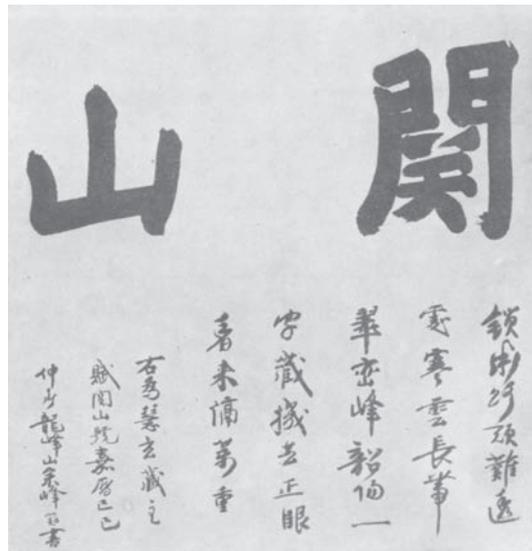


(石橋鯉城)

新和様半紙 五段~準初段



(石橋鯉城)



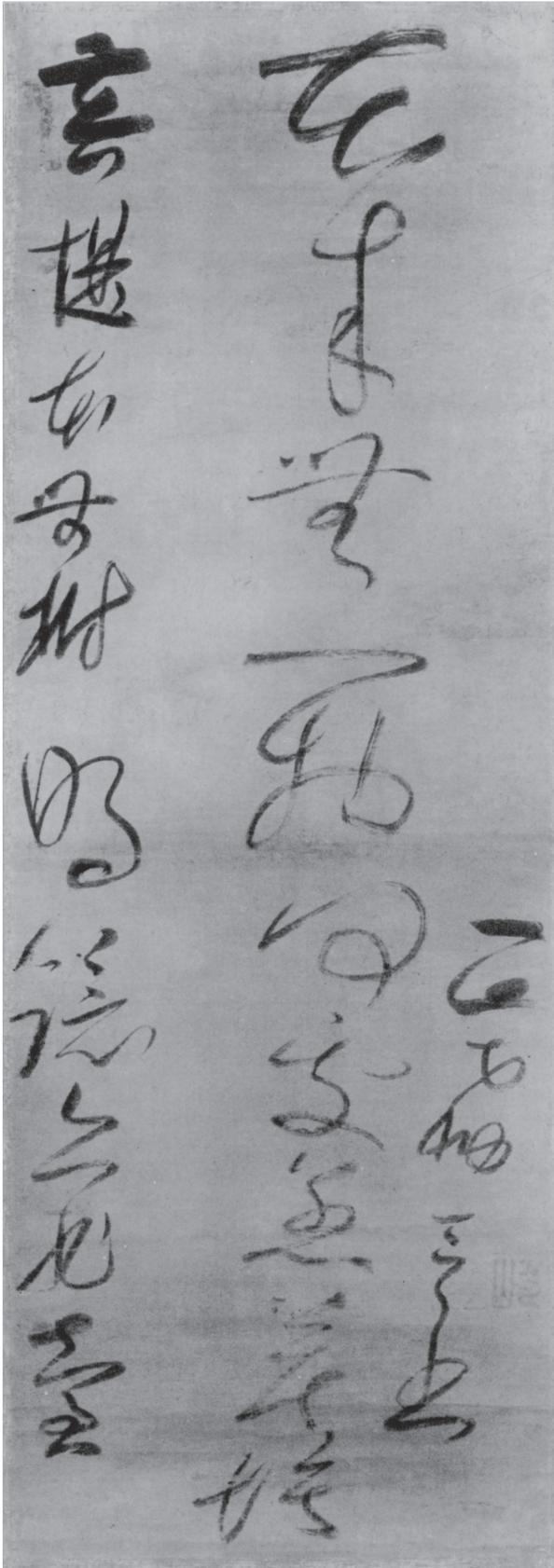
▲宗峰妙超「関山號」

平安時代から鎌倉時代へ移り変わる時代は、貴族社会から武家社会へと一大変革期に当たっています。社会や経済が変わったことはもちろん、文化の面でも公家文化から武家文化への変革が見られました。平安朝の優雅な貴族趣味を排斥し、簡素な中にも逞しく意欲的な力が褒め称えられる傾向が見られます。ここにさらに、宋朝の文化が伝来し、鎌倉文化は成熟期を迎えます。そしてその宋代に新しく興った革新書道が、日本書道界にも一大旋風を巻き起こします。宋の四大家と呼ばれる蘇東坡、黄山谷、蔡君謨、米元章の四人の書法が、入宋の僧たち（栄西禪師や俊芿など）、或いは来朝の僧、蘭溪道隆、宗

峰妙超や寧一山等によって日本にもたらされました。中国でも異端とされていた黄山谷などの独特な個性的な書は王羲之を典型とする正統派の書風を標榜していた我が国の書道にも少なからず影響を与えたのです。また一方、それら禅宗の僧たちによる新興の書風は、技術よりも人格の表現、心境の高さを示すという禅宗様が行われるようになり、僧侶の地位の向上と共に盛行していきます。

菩提本樹無し、明鏡また臺にあらす。
本来無一物。何れの處にか塵埃を惹かん。

一山老衲一寧書



▲寧一山（一山一寧）「六祖偈」

一山老衲一寧書 本来無一物 何處惹塵埃 菩提本無樹 明鏡亦非臺

（この書は左の行から読みます）

第70回書道學會展・第70回全日本学生書道展 開催中止のお知らせ

令和3年1月4日～10日に予定しておりました両展覧会につきましては、
新型コロナウイルスの感染拡大防止の観点から、開催を見合わせる事となりました。

作品募集 出品期間：令和3年1月18日[月]—1月22日[金] 必着

漢字かな交じり書と漢字造型の二つの新しい書美を目指す

公募 第34回 不二現代書展

会期 令和3年3月17日[水]—21日[日]

会場 大阪市立美術館 地下展覧会室 (大阪市天王寺区茶臼山町 1-82)

時間 午前9時30分～午後5時 (入館は午後4時30分まで)

出品料 13,000円 (税込)
※ただし部門を跨いで出品の場合は2点目以降1点につき7,000円とする。

褒賞 文部科学大臣賞・大阪府知事賞・大阪市長賞・
大阪市教育委員会委員長賞 他

※出品要項は本誌裏頁をご覧ください。

【主催】公益財団法人 日本書道教育学会
【後援】文化庁・大阪府・大阪市・大阪市教育委員会

～日本の伝統文化「書初」にご家族・団体でご出品を！～

令和3年 書初不二誌上展

作品募集

出品期間：令和3年1月12日(火)～1月21日(木) 必着

表彰 特選・金賞・銀賞・銅賞

特選・金賞には賞状及び賞品を、銀賞・銅賞には賞状を贈呈します。
成績は不二・ぺんの力各誌四・五月号に発表します。

*出品要項は本誌76～80ページをご覧ください。

〈送り先〉 〒101-8358 東京都千代田区西神田2-2-3 電話 03(3234)3956
〈問合せ先〉 公益財団法人日本書道教育学会 展覧会係 FAX 03(3234)3548

段級	会員番号
漢字半紙	不二教室 氏名
かな半紙	
新和様半紙	
漢字余幅	
かな余幅	
新和様余幅	
細字	
篆刻	
一字書	